保育と文学

――保育内容としての文学の役割について――

本田和子

ここで考える「文学」とは、「児童文学」あるいは「幼年文学」とよばれるものだけを対象としてはいない。また、表題の「保育と文学」という結びつきが連想させるように、「文学」という表現のもとに、「童話」とか「童謡」というような「文学作品」を対象とし、そのとり扱い方だけを考えるものでもない。

「言語および文字を媒介としておこなわれる芸術行為およびその所産」という程度に、極めて広く漠然と「文学」を解して、それが保育の場において占めている位置と、果している、あるいは果し得る役割について考えてみたいと思う。

(一) 保育内容としての文学作品

「お話を聞かせる」「紙芝居を見せる」というのが、保育者が保育の現場に文学作品をとり入れる最も一般的な形である。

そして、このようなとり入れられ方は、その性格から考えると、次の幾つかのタイプに分類されるであろう。

① 言語指導の材料として童話・童謡がとり扱われる。（一日の保育計画の中の一つの単位として展開される活動）

② 生活指導・宗教教育などの材料として扱われる。（会集・礼拝・その他の活動におりこまれて展開される場合も多い）

③ 幼児たちの要求に応えてなされる。

④ 幼児たちをしばらく静かにさせておくための手段に用いられる。（食事の後・激しい活動後・帰宅前など）

⑤ 時間のつなぎに用いられる。

⑥ いい作品にふれさせるためになされる。

以上のようなタイプが考えられる中で、最後の「いい作品にふれさせるため」に文学作品がとり扱われている場合は、実際には余り多くない。保育の場では、文学作品は他の何らかの目的を達成するための要具として、用いられているのが大部分であろう。

ここで保育内容として文学作品の果し得る役割を、今一度整理して考えてみる必要が生じてくる。文学作品は保育の場で、幼児たちにとってどんな意味をもっていて、与える保育者たちにとってどん

な役割を果すであろうか。

【文学作品の役割】

「幼児たちに対して」

1　幼児を楽しませる。すなわち、幼児の興味をひき、欲求を満足させる。

2　幼児たちに、未知の世界を知らせ、未知の経験を与える。

3　想像力を飛翔させ情操を豊かにする。

4　言語生活を富ませ、言語による抽象化の能力を養う。

5　受容する態度を培う。

6　幼児たち相互の結びつきを作る。すなわち、一つの物語を一つの場所で聞くことによって生じる連帯感を培う。

「与える保育者に対して」

1　思想伝達の媒介物としての役割を果す。すなわちある特定の世界観・道徳などを伝える材料となる。

2　幼児の趣味・傾向を方向づける材料となる。

3　生活指導の道具となる。

4　浄化の道具に用いる。

5　幼児の心性を知る材料となる。

6　幼児と成人の結びつきを作る。すなわち、共通の感動体験をわかち合うことから生じる連帯感を培う。

文学作品は、保育の場で保育者にとっては種々の目的のための材料として、要具としての役割を果している。しかし、幼児にとっては、それ自体が幼児を楽しませるものであり、作品にふれることによって、幼児は未知の世界に感動し、未知の経験をし、より高くより新しいものへの憧憬を抱かされているのである。

保育者たちは、要具としての文学作品の役割のみを重視しすぎるきらいがありはしないであろうか。

一般に、小学校以上の教育の場において、文学の学習は国語科の中でおこなわれるが、国語科は言語技術の学習を中心とする要具教科であることを特色としている。すなわち、国語で表記された内容を正しく理解出来るまでの、さまざまな基礎的な技能をのばすことを目的としているわけである。しかし、その中で文学の学習は、それ自身が内容教科の性格をもつものであり、言語技術の学習とは区別して考えられねばならないとされている。

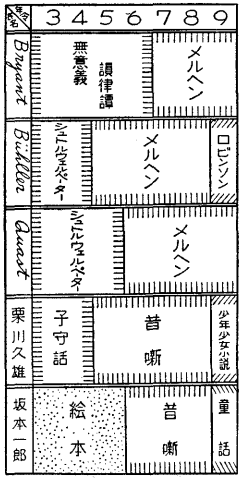
保育の場においても、文学作品を材料として用いる場合に、言語技術・生活技術その他をのばすため、あるいは特定の意志を伝達するためなどの手段として用いられる場合と、文学作品の学習を専らさせるために用いられる場合との二つを考え、そのバランスを失わないように注意すべきではなかろうか。特に、文学作品を後者の場合に用いないならば、真の意味で文学作品を使用する意味が失われてしまうことを忘れてはならない。

こう考えてくると、文学作品にふれさせるためだけに、童話・童謡などを選ぶ場合が生じてくるわけで、作品の選択が重要な問題になってくる。要具教材として用いる場合は、その目的を達成するのに最も効果的なものを選べばよいのであるが、内容教材となると、その選択がむずかしくなってくる。「よいものを選ぶ」と簡単に言うが、「よい」の基準はどこに求めたらよいであろうか。芸術作品の評価は極めてむずかしい問題であって、ともすれば、評価する人の主観的な「好み」によって左右されがちである。保育者Aがたいへんよいと思う童話と、Bが最も「よいもの」として選んだ童話が、異

なったものである場合は少なくないであろう。

そこで先ず、選ぶ場合の客観的な基準となり得るものを幾つか挙げてみよう。

① 幼児たちの興味の発達に即応したものであること。



好む童話については、さまざまな研究者によって発達段階が設けられている。

代表的なものを幾つか挙げれば右のようである。

この表から、大体、三、四歳児の好むものと、五、六歳児の好むもの、すなわち幼稚園年少組と、年長組の幼児の好みにちがいを見出すといったよみとり方が許されよう。但し、ラジオ・テレビの普及や、種々の文化的な刺戟によって、最近の都会の幼児たちの興味は、この表に示されているものより、多少進んだ段階にあるように思われる。

② ことばの環境として正しく美しいもの。

文学が言語に頼る芸術である以上は、その用いられていることばが正しく美しいものであることは当然である。しかし、幼児向けの文学作品には、余りにも幼児の未成熟さに迎合した甘く、不正確なものが少なくない。

③ 知性に訴えるよりも感受性に働きかける性質のもの。

幼年童話には比較的理詰めで、納得させようとするものが多いが、これは文学としては邪道であろう。

④ 何らかの意味で成人の感動をも誘うもの。

幼年童話から成人の感動を誘うものを選ぶのみでなく、逆に成人の感動した文学作品を童話化して、幼児の世界に送りこむ努力もなされてよいと思う。最近のテレビ・映画の発達は、かなり発達的にみて程度の高いものを幼児の世界に送りこんでいる。小学生向きのマルシャーク作「森は生きている」が映画化により、幼稚園児たちの大好きな物語と化した例があるが、幼児の世界に送りこむのにふさわしい手続きさえとれば、成人と幼児が共通の感動体験を分かつことも容易であろう。

以上に、一応の基準となるものを挙げてみた。しかし、基準を満足させ一応の枠にはまっていても、幼児の世界の文化財としてみずみずしい生命の躍動に乏しい作品もあるであろうし、その逆に近いこともあり得よう。所詮、各々の作品には各々の生命があり、そのどれを数多い作品の中から選ぶかは、私たち与える保育者の文学性にゆだねられている。保育者のよい感覚が切望されるのである。

こうして選ばれた作品が、どのようにして与えられるかという問題は、その選ばれた作品の性格と密接なつながりをもっている。すなわち、内容教材として用いられる文学作品は、その内容の生命を最もよく生かすような用いられ方がなされるべきであるから。

作品をそのまま与える場合もあってよいであろうし、解説を加えながら、あるいは視覚化して、あるいは話合いをまじえて、作家と結びつけて、などさまざまな与え方が、作品に応じて試みられてよいと思う。各々の作品は各々の生命をもっているということ、そしてその生命にふれさせるために、その作品が幼児の前に提出されているのだという目的さえ明確であれば、その与えられ方は自ずから定まってくるのではなかろうか。

(二) 保育内容としての文学活動

一般に教育の場において芸術が考えられるとき、児童が芸術作品を受容する場合と、児童自身が表現活動をおこなう場合との、二つの面がとり扱われる。保育の場においてもそれは同様であるが、絵画・音楽などは、むしろ幼児の表現活動の対象として扱われていて、実際には既成の作品を鑑賞させるという場面は余り多くない。それに比して、保育の場における文学は、専ら幼児を受け身の立場にのみおいているようである。すなわち、文学作品を与えるということだけが考えられがちなのである。

文学的表現活動は、主として文字を用いた創作活動である。そのために、まだ文字習得以前の段階にある幼児たちには、文学的表現活動が余り展開され得ないし、したがってそのとり扱い方も考えられずに終りがちである。しかし、幼児の生活の中からも、文学活動の萌芽を見出す努力を怠ってはならないと思う。

幼児の文学的表現活動はことばによる創作である。これは、幼児のふと口にした簡単な詩、あるいは物語などであるが、これらの中には純粋の創作とみなし難いもの、すなわち模倣やほんの一部分の改作も多く、厳密にはその行為を文学活動、その所産を文学作品などとよび得ないものである。

幼児の描いた絵の中から、時には芸術的な価値を見出し得るものが発見されることがある。その絵に、形や色彩を媒介として人間の感覚に訴えかけてくる何らかの「気分」が表現されていれば、そしてその「気分」が美に連なるものであれば、それを芸術作品とみなすことも許されるであろう。しかし、文学は、ことばという社会的な約束の上に成立つものを用いて、何らかの「意味」を表現し、それによって人間に訴えかけるものである。それ故に、言語もまだ十分に習得し得ぬ段階にあり、抽象化も進んでいない幼児たちに、文学作品を期待すること自体が無理であり、無意味であるといえよう。

それ故に、他の表現活動に対するとき以上に、幼児の文学活動に対する場合は、作品を問題とすべきではない。幼児に期待するのはあくまでもことばによる創作への興味・表現への楽しみであり、保育者の関心もそれらの興味・楽しみを伸ばしていくことに向けられるべきである。そして、幼児たちをして、ことばによる創作が、単に創作者自身を楽しませるだけでなく、他人に訴えかけ、他人をも楽しませる性質をもっているのだということに気付かせていくならば、文学活動の社会的な役割を、経験として認識させることが出来るであろう。

（尚絅短期大学）